

地域と協同の 研究センターNEWS

2017年11月25日発行
159号

【巻頭言】

『地域とつながるコープみえ』

コープみえ鈴鹿センター 阪 達男

今年度のコープみえは、地域づくりへの参加を積極的にすすめていくことを基本に活動を展開しています。よりよいくらし、地域づくりを行政や地域の諸団体、社会福祉協議会とのつながりを強め、協働した取り組みを地域の皆様とご一緒に様々な課題でおすすめ。地域の課題や問題、安心してくらしつづけられる地域づくりをめざし、組員運営組織として理事会と直接つながっている地域毎のエリア会が中心となって活動をおこなっています。特徴的な活動としては、以下の3つがあげられます。

1つ目の活動として、理事会とエリア会が共催でコープカフェという名前での居場所づくりが各地域で催され、くらしの困りごとや地域の情報などを交流する場として開催しています。

2つ目の活動として行政・諸団体と連携して、見守り活動を展開していく方向で取り組んでいます。現在、コープみえでは、四日市市、津市、名張市、松阪市、桑名市の以上5市と見守り協定を締結しています。三重県下で1日280台のトラックが主に生協商品を組員宅に配達していることから、この配達網を生かして今後、全市町と見守り協定を締結していく方向ですすめています。

3つ目の活動として伊勢センターと鈴鹿センターでは社会福祉協議会と連携し、生活困窮者支援事業の推進を図る目的で組員が注文したキャンセル商品を地域福祉に寄与することを目的に各市の社会福祉協議会と協定書を締結し、連携して取り組むこととしています。他のセンターでも今後、検討して取り組む予定としています。

地域の独自の取り組みとして鈴鹿センターでは以下の取り組みも実施します。

地域コミュニティの希薄化が著しい社会環境の中で乳幼児とその母親が孤立しがちな状況がすすんでいます。その悩みを解消しようとしているNPO法人が鈴鹿市にあります。このNPO法人が催しているコミュニティスペースとコープみえ鈴鹿センターが催している子育て広場への行き来が可能になれば、子育てに関する情報が今以上に得られる機会が増えることとなり、一人で悩みや不安を抱えこんでいる母親が自己肯定感を増大し、自分の子育てに自信を持ち、楽しい子育てが行えると考えられます。このNPO法人とご一緒に子育てに関する取り組みをすすめていこうと考えています。

最後に、コープみえとして大切にしていることは、地域から信頼され必要とされる生協づくりです。人と人とのつながりを大切に、ある時はコープみえがけん引役となり、ある時はパイプ役となるように必要に応じて役割が発揮できる協同組合を目指し、今後も地域にお役立ちができる活動を展開していきます。

(さか・たつお)

9月～11月、会員の輪がさらに広がるように、研究センターの企画や取り組みを紹介してきました。

この3カ月で、個人正会員2名、個人賛助会員7名が加わり、正会員249（個人233・団体16）、賛助会員114（個人112・団体2）になりました（11月20日現在）。お知らせで今も加入を考えている方もいるでしょう。

これからも、企画や取り組みなどにお誘いしましょう。「知り合い・共感」「出会い・学び合い」「行動を促す力」「気づいてもう一歩深く」、地域に「学びの協同、をひろげ、新しい協同を促す場、研究センターに集まる輪をひろげましょう。



CONTENTS

【巻頭言】『地域とつながるコープみえ』	1
阪 達男	
【報告】三河地域懇談会活動―秋の岡崎まち歩き 歴史と文化に学ぶ―	2
【報告】第4期研究奨励助成報告会「外国人住民を孤立させない地域をめざす研究会」を実施して 外国人ヘルプライン東海	3
【報告】研究フォーラム 地域福祉を支える市民協同―公開研究会を開催	4
【情報クラブ (P.5～)】【11月活動より (P.7)】	
【企画案内】公益財団法人 生協総合研究所 公開研究会	8
【書籍紹介】生活協同組合研究 2017.2 Vol.493特集：高等教育機会の格差と課題を考える【12月の予定】	

三河地域懇談会

秋の岡崎まち歩き 歴史と文化に学ぶ一日

文責:伊藤小友美(事務局)

11月3日、紅葉の始まった秋晴れの日、三河地域懇談会世話人会主催の「秋の岡崎まち歩き」を10人の参加で開催しました。三河地域懇談会では、この間「地域で粋な老い支度を」をテーマに活動をしていますが、そのためには地域を知ること、考えること、語り合うことが大事と考え、座学だけでなくあちこちへ出かけるフィールドワークを重ねてきました。奥三河や渥美半島、豊川市、豊田市足助町、佐久島等で学んだことは多く、「三河」の地域の広いこと、歴史・風土・文化の違い等のあることも実感してきましたが、今回は、徳川家康生誕の地、岡崎を市の観光ボランティアガイドさんにご案内いただきました。概要と参加者の感想を紹介させていただきます(右、写真は大樹寺にて)。



コースは岡崎公園(岡崎城、三河武士のやかた家康館等)を見学し、創業百年を超す「八千代本店」で家康も愛した八丁味噌を使った菜飯田楽をランチにいただき、その後名鉄バスで大樹寺へ向かい、伊賀八幡宮まで歩くというものです。参加者のお一人の歩数計は、この日1万8千歩を記録したとか。好天に恵まれ、一同とてもいい汗をかきました。

＜岡崎公園は土の城 「城」の漢字のごとく＞

岡崎城は徳川家康公が誕生したことで知られています。



家康は、今川義元が戦死するまで、人質として尾張・駿府にて少年期を過ごした後、岡崎城を拠点に天下統一への基礎を固めていきます。

「五万石でも岡崎様はお城下まで舟が着く」と歌われているように、岡崎城は菅生川と矢作川の合流地点にある龍頭山という丘陵を利用して造られています。防御力を高めるために、人工的に堀切や三日月形の堀を備えたのは徳川時代です。古い地形図を見せていただき、目の前の空堀や城を眺めながら、説明を聞きました。攻め上り難くする目的で溝を掘り、掘った土を盛り上げて固めて土塁としています。城郭としては、全国で4番目に広いとかがい、びっくりしました。

天守台石垣は、雛壇を設けて二段で積んでいるのが特徴だそうです。室町時代に掘られた空堀の湾曲した形を変え、内側に貼られた石垣は、日本で類を見ない情景と言われ、日本三大石都の礎を築くことにもなりました。

菅生川端石垣は、関ヶ原の戦いの後に岡崎に入った本多氏の3代目忠利が築いた石垣で、今も市により発掘調査が行われています。400m以上途切れなく続いている石垣、その長さは日本一だそうです。

＜ビスタラインを行く＞

ビスタラインの「ビスタ」とは「眺望・展望」を意味する言葉で、大樹寺と岡崎城を結ぶ約3kmの直線をビスタラインと呼びます。

＜参加者より＞ ○岡崎に住んでいながら、初めて訪れるところもあり、丁寧な説明により新発見も多く、実り多い一日でした。○岡崎は、戦国時代、小さな一族が人と組織を護り抜き、260年の安定の礎を築いた三河武士の育ったまち・地域でした。目的に向かって自由闊達に議論し人と人の和・団結を大事にする松平一族の気風・知恵、組織哲学が生き続けていたことを、改めて思い起こしました。○大樹寺から伊賀八幡宮への途中、井田城址の碑、西光寺の僧の碑など、往時をしのぶ遺跡がひっそりと立っているのが、実に歴史の街らしく心に沁みました。

これは徳川三代将軍家光が寛永18年、家康の十七回忌を機に徳川家の祖先である松平家の菩提寺である大樹寺の伽藍の大造営を行う際、「祖父生誕の地を望めるように」との想いを守るため、本堂から山門を通してその真中に岡崎城が望めるように伽藍を配置した事に由来しています。

そして歴代の岡崎城主は、天守閣からここに向かい毎日拝礼したとも伝えられています。岡崎城は昭和34年に再建されましたが、大樹寺から望む眺望は約370年前の当時のままで、門越しに望む岡崎城の姿はまるで額の中の絵のようです。向かいにある大樹寺小学校の体育館は、景観を損ねないようにと半地下になっています。

さて私たちは、岡崎公園から名鉄バスで松平家・徳川将軍家の菩提寺として名高い大樹寺へ向かいました。家康19歳の時、桶狭間合戦により、今川義元が倒れたので身の危険を感じ、大高城から大樹寺にのがれ、13代住職、登善上人に先祖の墓前で自害すべく覚悟のほどを表すと、上人は「厭離穢土、欣求浄土(戦国乱世を住みよい浄土にするのがお前の役目)」と教諭し、家康はこの8文字を終生座右の銘にしたそうです。「位牌は三河大樹寺に祀るべき」との遺命により、徳川歴代将軍の等身大の位牌が安置されています。ずらっと並んださまは壮観でした。印象的だったのは、五代綱吉の高さが124cmだったこと。綱吉と、6歳で亡くなられた家継(135cm)以外は、みな150cm~160cmでした。

大樹寺見学の後、西光寺、井田野の千人塚、井田城址をまわり、伊賀八幡宮まで歩きました。歴史のみならず、植物にも詳しいガイドさん、ありがとうございました。

2017 年 10 月 21 日 第 4 期研究奨励助成報告会を開催しました。

「外国人住民を孤立させない地域をめざす研究会」を実施して 外国人ヘルプライン東海

研究報告の要旨

「外国人困りごとなんでも相談会を実施中」：日本では、在留資格がない人は行政サービスを受けることはできません。どんな相談も多言語で受けて地域につないでいます。誰も孤立させないためには当団体だけでは限界があり、NPO・行政機関とも連携が必要です。なぜつながらないかを事例ごと、制度ごとに発信し、制度の不備から政策提言や事業を始めています。相談者本人は料金負担できないことが多く助成金を活用しています。

「研究の目的」：どんな社会資源とつながることができたか、できなかったか。現在の制度でどんな点が不足しているか。困りごとの解決にあたって支援者がその欠陥を埋めたかを明らかにする。

「研究の方法」：相談データ分析（相談地域、国政、性別、在留資格、相談内容～いくつかの問題を抱えていることが多いDV、仕事、住まい、労災など）、事例分析、専門家を呼んで研究会を実施

「研究会の概要」

一回目：東南アジア 30 代女性。日本人の夫の暴力、義母の心理的暴力、家族以外のつながりが無い。課題：DV は逃げる決断が難しい。自分への信頼が下がり逃げる力がない。専門の相談につなげようとしたが、不信感をぬぐえず拒否された。見守りのポイントは子ども課、子どもが生まれた病院、保健所からの情報。問題点：通訳制度がすぐ使えない。宗教団体に関わる機関がない。

二回目：南米 50 代女性。支援対象は 20 代（統合失調症）

三回目：中国人、障害児（身体、精神一級手帳）。中国人家族で後から子どもだけ来日した。来日当初に役所で病院（車いすが必要）の相談はしたが、学校に行っていないことは相談してない。課題：10 歳で来日して今六年生の年齢。重度の障害があるが日本語はできない。日本での就学制度、障害者制度を伝えられない。外国人児童生徒の教育・就学への学校現場での対応が難しい。日本国籍でなければ義務教育ではないが「子どもの権利条約」では教育を受ける権利はうたわれている。どう欠陥をうめたか：医療通訳者がヘルプラインにつなげられた。学校就学支援、養護学校を紹介した。学校を見て親も希望することとなった。基幹相談支援センターと連携した。

「研究会をおえて」

- 「つながらない言葉の壁」がある。
- さまざまな支援者がつながる場を提供できた。
- 新しい取り組みにつながった。モリコロ基金を活用して外語人の子育てサポートプロジェクトに着手。
- 専門家との連携（相談データの整理、記録の徹底化）

報告会では研究報告をうけて ①「言葉の壁」「在留資格の制度」「通訳制度」、②「行政の情報提供」「地域の人を育てる」、③「支援者のつながり」「相談の方法」「お金・費用」、④「情報弱者（コミュニケーション）」「読む力」などのアプローチが必要なことを参加者を含めて話し合いました。

地域と協同の研究センター専務理事・向井 忍（むかい・しのぶ）

■外国人ヘルプラインの事業

（日本語、英語、タガログ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、ネパール語、ベトナム語、ロシア語）

- ・外国人向け何でも定例相談会
- ・電話相談
- ・通訳派遣、同行支援事業
- ・研究会
- ・翻訳事業（地域で外国人が必要とするもの、役所に出す書類など）
- ①地域につなげる
- ②支援者同士でつながる
- ③つながらない人をサポートする
- ④つながらないことを伝える
- ⑤作り出す

研究フォーラム 地域福祉を支える市民協同

公開研究会を開催

報告：熊崎辰広（事務局）

今年 7 月、研究フォーラム「地域福祉を支える市民協同」では、これまでの研究成果を論文の形でまとめた報告集を発行しました。今回の企画は、その内容報告とともに論議をさらに進めて、単なる報告集ではなく、内容を深めることで一冊の成書にすることを目指して企画されました。10 月 31 日（火）、公開研究会として、議論を深めるために研究フォーラムの参加者以外にも広く参加を呼びかけました。まず、報告集で基調報告を書かれた中京大教授の小木曾先生から、内容報告をしていただきました。

報告演題 地方分権化政策下における地域社会の市民協同とは

（報告集の内容を踏まえたものになっていますが、とくに強調された部分を紹介します）

1. なぜ市民協同なのか。その意味について：グローバル化と高齢化社会に対する新自由主義的対応として、平成の大合併を軸とする地方分権化による新しい自治体運営の方法が追及されるなかで「新しい公共」といわれる地域の力の掘り起し、市民活動の促進政策が「協働」をキーワードに進められた。NPO 法人の役割が、その補完的役割が要請されている構造のなかで、それだけでなく新たな自治能力の展開や、地域の住民のにとってその生き方が変わる契機もふくまれているのではないかと。その活動の事例として NPO 法人 MtoM の分析をすすめてきた。

2. NPO 法人 MtoM の出発と 5 年目の到達点：（MtoM の活動内容については「報告集」のなかに詳しく紹介されており、ここではその活動の出発点となる「いきいきワーカーズ瀬戸」の活動から考察がすすめられた）

1995 年を転換点とし、服部さんが中心となってみんなで働き、みんなで運営という新しい働き方（ワーカーズ）が模索された。行政や企業ではできない、必要なサービスを供給できるのは市民セクターだ、という自覚となった。仕事としては生活便利屋事業として、生協のモーニングコープ商品の配達事業を進めた。事業に責任を持つということから「行動する組合員」となり、はじめて地域が見え始め、そこから「自立した市民」としての「当事者性」という問題意識をもつことができた。最初の活動として、地域の団体紹介マップづくりがあり、ここから「つなぐ」という中間支援活動が生まれ、ミニ公共圏の形成として、「窯のひろば」の建設運動が進められた。のべ 850 人の参加と資金として 350 万を得て完成。この建設過程そのものが基調な関係づくり、「つなぐ」活動の実践となった。

基本的財政基盤として 4 つの事業をすすめてきた。①キッチン ②プース貸 ③野菜市の開催 ④街角の便利屋（詳しくは、報告集参照）。2006 年に「民 min 祭り」が開催され足元の国際交流が生まれ、コープあいち、南医療生協の協力や、通訳・司法書士などの協力を得て、地域レベルでは画期的な草の根の交流が生まれた。

5 年間の活動の中で、新しい傾向として若いママの参加があり、環境、フェアトレード、アレルギー、平和等を考える契機と場が生まれている。「自分らしく生き終えることのできる仕組み」をつくりたいと、健康勉強会も生まれている。（その後の経過についても報告集を参照）

3. MtoM のまちづくりの方法論：MtoM は、より中間支援組織としての性格をはっきりさせ、高層の住宅団地の一角に「toto」を拠点としてあらたに出発した。中間支援（機能）とは、住民間、市民間のコミュニケーションを活性化することとで、当事者が獲得される。日本では「手を貸すことも貸されることも不慣れな人々であふれかえっている」ので、問題が問題として出てこない社会なので、しゃべりあう場所、住民の出会いの契機と場が必要。「みんなの場所」、広場、パール（イタリア）等の欲求される「公共圏」、行きたいと思える場づくり、が求められている。

まちづくりにおける当事者性を確保するために、私的な困りごとを社会に吐き出させること（表明すること）、それは表現できる、表明していいという感性を生み出すことでもある。おせっかいプロジェクト、さるなかとんな協議体、「困ったときの便利帳」づくり等の活動がすすめられている。

4. MtoM 成立の社会的背景を考える：1990 年代半ば、地方分権化政策が展開され、国家、自治体の運営の中に市民の力、住民の活動（総じて地域の力）を組み込む仕組みの追及（協働）だが、これは行政効率化の理論と政策であり、中央集権化に対する批判として前からあった。しかし一方、地方への機関委任事務の廃止で、いわば自治事務として、はじめて地域のニーズから出てきた条例が可能になった。この背景には、市民のちから、とくに若い人たちの生き方の変化がある。

また高齢化社会を考えると、マスとしての高齢者の増加、また家族規範のゆらぎが生まれ、新しい家族のありかたが問われるようになった。これらを背景に、新しい価値の創造として、MtoM の活動をみることができる。

以上の報告をうけて、研究会では活発な質疑応答がありました。その内容については、今後の研究フォーラムのなかで課題として受け止め、報告集の内容を深めることができればと思います。

↑ 報告集は「地域福祉を支える市民協同報告集 2」として 200 円で頒布しています。また地域と協同の研究センターホームページでも読むことができます。

情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 税別
<p>▶再生可能エネルギー 拡大に向けた 生協の取り組み</p> <hr/> <p>NAVI 2017. 11 No. 788</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 再生可能エネルギー拡大に向けた生協の取り組み <コープのある風景> コープぎふ <こんにちは！生協女子ですっ！> 青森県民生協 榎引直恵さん <地域に愛される店づくり・人づくり> 京都生協 コープ祝園駅 <今月のコープで笑顔がキラリ> コープみえ <エッセイ わな猟師の春夏秋冬> 千松信也 <宅配・現場レポート> 富山県生協 <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP商品> CO・OP 国産乾燥ごぼう <日本全国ふだんのくらしを支えたい> コープおおいた <想いをかたちにコープ商品> CO・OPチョコアイスボール <つながろうCO・OPアクション情報> 福島子ども支援・八王子、パルシステム東京 <明日のくらし ささえあうCO・OP共済> コープながの <この人に聴きたい> 国文学研究資料館長 ロバート キャンベルさん <ほっとnavi> NPO 法人 消費者スマイル基金 エフコープ</p>	<p>2017 年 11 月 A4 判 36 頁 360 円</p>
<p>▶空き家で街を元気に 困った住宅・店舗の 活用法</p> <hr/> <p>社会運動</p> <p>2017. 10 No. 428</p> <p>市民センター政策機構</p>	<p>特集 空き家で街を元気に 困った住宅・店舗の活用法 I どうしてこうなった 空き家問題への考え方 FOR READERS マンション大暴落を見据え目の前の空き家問題を考える やわらかくてしぶとい、人口減少時代の都市デザイン 首都大学東京教授 饗庭 伸 不動産はもう儲からない、空き家活用のポイント 住まいと街の解説者 中川寛子 空き家問題の解決は所有者の「悩み・願いの開示」から 起業支援活動家 松村拓也</p> <p>II だから、こうする 困った住宅・店舗の使い方</p> <p>01 楽多舎 親族のいない故人の家をコミュニティカフェとして活用</p> <p>02 カサコ 家開きをして多世代多国籍の人が集う場に</p> <p>03 ふらっとスペース金剛 安心して私らしくいられる場所を求めて</p> <p>04 中山モダンハウス みんなでシェアすれば一軒家生活も楽しめる</p> <p>05 クルトコ 団地の衰退した商店街、その光景が住民を動かした</p> <p>06 ほーぷサロン 様々なサークルに人が集う、ここは地域の文化の中心</p> <p>07 世田谷トラストまちづくり 区民の主体的なまちづくりを丁寧に支援したい</p> <p>…Interview 保坂展人世田谷区長に聞く— 空き家でどんなまちづくりができますか？</p> <p>Column 移住希望者をバックアップ—山形県遊佐町 韓国語翻訳家の日々 子育てはつづくよ 第1回 子ども農業（チャシクノンサ）で気楽になりませんか？ 韓国語翻訳家・ライター 齋藤真理子</p> <p>悼みの列島 日本を語り伝える 第5回 海を越えて来た少女たちは、いま ライター 室田元美</p>	<p>2017 年 10 月 A5 判 150 頁 1,000 円 (税別)</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 税別
<p>▶JA自己改革の現場から</p> <hr/> <p>月刊 J A</p> <p>2017. 11 vol. 753</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>特集 スゴイ農業、スゴイ J A J A 自己改革の現場から</p> <p>① 人と人をつなぐ自己改革の取り組み～農業経営者育成塾の実践に学ぶ～ ー J A 大井川（静岡県）の取り組み 小林 元</p> <p>② 土にこだわり水稲多収栽培 ー（有）ファーム菅久の取り組み（岩手県雫石町） J A 全中広報部 農政トピック 地域活性化としての農泊ビジネスについて考える 株式会社農協観光 営業企画部 地域交流推進課長 石井唯之 きずな春秋 ー協同のこころー 童門冬二 私のオピニオン 指出一正 J A トップインタビュー 地域にとってはなくてはならない J A へ 小林 徹（岐阜県 J A にしみの 代表理事組合長）</p> <p>展望 J A の進むべき道 「食」「農」「協同組合」にかかると国民理解の醸成への取り組み 石堂真弘（J A 全中常務理事）</p> <p>海外だより [D. C. 通信] 連載 78 ハリケーン・ハービーの被害と「農業がつなぐ絆」 吉澤龍一郎</p> <p>平成 28 年度 J A 経営マスターコース優秀論文紹介 塾長賞 地域資源を生かした三方よしの販売事業改革 長谷川 修 / J A いわて中央（岩手県）</p>	<p>2017 年 11 月 A 4 判 48 頁 年間予約 5,109 円 （消費税込）</p>
<p>▶安心して暮らせる 認知症社会のために</p> <hr/> <p>生活協同組合研究</p> <p>2017. 11 Vol. 502</p> <p>公益財団法人 生協総合研究所</p>	<p>■巻頭言 暖かい手と手をつなぐ 神野直彦</p> <p>▶特集 安心して暮らせる認知症社会のために 今、認知症を正しく理解することが必要だ ー認知症像は大きく変わりつつあるー 繁田雅弘 地域づくりから、認知症対策の知恵と工夫が生まれた 森脇俊二 認知症対策への当事者の参画 ースコットランドを中心にー 川村雄次 変わりつつあるケア ー拘束・監視から見守りへー 宮島 渡</p> <p>コラム 1 認知症になっても大丈夫。～そんな社会を創っていきましょう～ 藤田和子</p> <p>コラム 2 認知症になっても安心して暮らせる社会 ー企業・地域の取り組みー 清川卓史</p> <p>コラム 3 認知症問題に生協はどう取り組むか ー京都生協の事例からー 白水忠隆</p> <p>■時々再録 よそ者、ばか者、若者と言うけれど 白水忠隆</p> <p>■研究と調査 インドネシアの協同組合：課題と好機 スリ・ワーユニ（翻訳：鈴木岳・山梨杏菜）</p> <p>■本誌特集を読んで（2017・9） 柴沼 均・中林真理子</p> <p>■新刊紹介 『1850 年以降の生協のグローバル・ヒストリー：運動と事業』 （A Global History of Consumer Co-operation since 1850） 栗本 昭 樋口恵子著『その介護離職、おまちなさい』 山崎由希子</p> <p>■研究所日誌 ●公開研究会（京都 12/9） ●第 15 回生協総研賞・助成事業の対象者を決定しました ●2017 年度 第 11 回「表彰事業」受賞式のご案内 ●宮坂富之助先生を偲んで</p>	<p>2017 年 11 月 60 頁 B5 判</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 頁数
▶協同組合による 社会改革論の 特徴と課題	文化連「第8次中期事業計画」の実践報告 会員の声を聴き共有する活動について 伊藤幸夫 二木教授の医療時評 (153) 日医総研「日本の医療に関する意識調査」を複眼的に読む ー医療満足度の向上と平等医療への強い支持 二木 立 第8回厚生連医療材料対策研究会を開催 西田真治 信州中野駅前交差点を想定し多数傷病者事故対応合同訓練 宮本貴幸 第21回厚生連病院と単協をつなぐ医療・福祉研究会報告 馬場真弓 日本最先端の大規模多機能地域拠点で地域を支える 小磯 明 現代社会と協同組合 (8) 協同組合による社会改革論の特徴と課題 北出俊昭	2017 年 11 月 B5 判 80 頁 文化連報 編集部 03-3370-2529 *注
文化連情報 2017. 11 No. 476 日本文化厚生農業協同組合連合会	韓国農業の実相ー日本との比較を通じて (15) 米韓FTAと農産物輸入ーその1 品川 優 臨床倫理メディエーション (17) 「医療メディエーション」モデルによる意思決定 (2) 中西淑美 野の風●フィギュアスケートに魅せられて 福田淑子 セントラルキッチンさくの取り組み (5) 松本誠治 全国統一献立●日本三大焼きそばのひとつ 秋田の「横手やきそば」 佐藤未歩 岩手県の鶏ふんバイオマス発電の取り組み ー養鶏業におけるエネルギー資源の活用 大平佳男 デンマーク&世界の地域居住 (102) アメリカ：CCRCとアシステッド・リビング 松岡洋子 熱帯の自然誌 (20) 私の暮らし カリマンタンの町にて (2) 安間繁樹 イギリスの社会的企業 若者就労支援：The Box Youth Project (2) プログラムとプロジェクト 小磯 明 ◆第4回厚生連放射線科医療機器ライフサイクルコスト会議開催のお知らせ ◆第5回厚生連診療情報管理士研究会開催のお知らせ ▶線路は続く (116) 中央西線 木曾路はすべて…／西出健史 ▶最近見た映画 ドリーム／菅原育子	

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

研究センター11月活動より

- 11月2日(木) NEWS 編集委員会
- 11月3日(金) 三河地域懇談会「岡崎まち歩き」
- 11月6日(月) 「市民の講座」企画検討会①
- 11月7日(火) 尾張地域懇談会・世話人会
- 11月8日(水) 三河地域懇談会・世話人会
- 11月10日(金) 生協の(未来の)あり方研究会第68回
- 11月11日(土) 共同購入事業マイスターコース第5回
- 11月12日(日) 第9回ポスト福祉国家のサードセクター論・公開セミナー
- 11月17日(金) 協同の未来塾⑥
- 11月20日(月) 「市民の講座」企画検討会②
- 11月22日(水) 研究フォーラム「環境」世話人会
- 11月24日(金) 常任理事会
- 11月28日(火) 2017年度寄付講義相談会



公益財団法人 生協総合研究所 公開研究会

英国とフランスの協同の思想と実践

—ホリヨークとゴダン生誕200年を記念して—

本年2017年は、『ロッチデールの先駆者たち』の著者であり、協同組合指導者として知られるジョージ・ホリヨークと、工場と共同住宅を軸とする2000人規模の「ファミリーステール・ド・ギュイーズ」を開設し、後に工場を労働者協同組合化したジャン＝バチスト・ゴダンの生誕200年にあたります。

今回の公開研究会では、それを記念して彼らの残した足跡と思考をたどり、今日の「協同」を改めて考える機会にしたいと考えます。

日時：2017年12月9日(土) 午後1時～4時 (開場12時30分)

場所：京都・コープ御所南ビル4階会議室 地下鉄 丸太町駅 6番出口すぐ

内容：報告1「G.J.ホリヨーク」杉本貴志(関西大学 教授)

報告2「J.-B.A.ゴダン」鈴木 岳(生協総合研究所 研究員)

コメントと質疑応答

参加費：無料(事前に下記へお申込み下さい)

問い合わせ・照会先：生協総研(豊嶋・中村範子) TEL03-5216-6025 メール：ccij@jccu.coop

主催：CCIJ公益財団法人生協総合研究所 共催：くらしと協同の研究所



特集：高等教育機会の格差と課題を考える<生活協同組合研究 2017.2 Vol.493>



2017年4月より、みなさんもお存じのことと思いますが、今まで、国の奨学金は、返済が必要な「貸与型」だけでしたが、お金を返さなくてもいい「給付型」が加わりました。大きな前進です。ちょうど、タイムリーに、「高等教育機会の格差と課題を考える」という特集の「生活協同組合研究」刊行されました。奨学金問題だけではなく、高等教育機会の格差と課題という点で、「奨学金」、「職業」、「大学中退」、「格差」、「貧困」の問題を考える上で非常に有益な論文です。大学生協の関係者や大学生の子供や大学進学を考えている子供を持っている方は、必読です。生協関係の奨学金の事例としては、福井大生協では、「福井大学生協奨学金」があります。また、コープさっぽろでは、「コープさっぽろ大学生育英奨学金制度」が創設されました。協同組合陣営でも高等教育の問題を考えて行く為には、そのきっかけになりうる1冊です。

購入は、生協総合研究所(TEL: 03-5216-6025)までご連絡ください。価格は、本体価格：500円です。

大学生協東京事業連合 岡本一朗氏

研究センター 12月の活動予定	12月15日(金)研究フォーラム「食と農」世話人会
12月1日(金)協同の未来塾「特別講座」	12月16日(土)くらしと生産をつなぐものづくり①
12月2日(土)東海交流フォーラム第2回実行委員会、理事会	12月18日(月)くらしを語りあう会、尾張地域懇談会・世話人会、研究フォーラム「地域福祉」世話人会
12月8日(金)組合員理事ゼミナール⑨	12月20日(水)岐阜地域懇談会・世話人会
12月9日(土)生協の(未来の)あり方研究会第69回、協同の未来塾企画委員会	12月21日(木)常任理事会
12月11日(月)「市民の講座」企画検討会③	
12月13日(水)三重地域懇談会・世話人会、三河地域懇談会・世話人会、協同組合間協同相談会	

地域と協同の研究センターNEWS159号

発行日2017年11月25日定価200円(税・送料込み)

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP http://www.tiiki-kyodo.net/